

T. S. エリオットの文化論の一考察： 文化定義とエリート階層の機能

小 原 俊 文

T. S. Eliot: A Study on his Theory of Culture and Élites

Toshifumi Obara

T. S. エリオットが、文学評論から次第に文化論、社会論にその軸足を移し始めたのは、1930年代に入ってからである。エリオットの文化論を代表する『キリスト教社会の理念』『文化定義のための覚え書き』の二作は、マシュー・アーノルドの『文化と無秩序』を批判し、キリスト教を基盤としたヨーロッパ文化の再生を願って書かれた。本論では、彼の文化論とその担い手たるエリート集団の理念を、主にアーノルドとの比較により考察した。その結果、彼の社会の共通基盤としての宗教、その宗教が受肉化したものとしての文化、文化の創造者かつ伝達者としてのエリート集団、エリート集団を含む連続的な文化レベルをもつ階層社会といったその文化論のいくつかの重要な概念を導き出すに至った。彼の教育論や、彼を含むモダニズム文学評価への課題を残したが、稿を改めて論じたい。

キーワード：文化、マシュー・アーノルド、宗教、エリート集団、階層社会

近年のモダニズム研究の進展は、1920年代以後のヨーロッパの文学・芸術上の革新をさまざまな視点から考察しつつあるが、いっぽうでモダニズムそのものの言葉の定義が拡散し、その時代区分も多様化し、確固たる焦点を結びにくくなっているのも事実である。そうしたモダニズム研究のひとつに、John Careyの『知識人と大衆』（1992年）がある。この著書は、モダニズムを直接の考察対象とするものではないが、20世紀の大衆社会の到来に対する知識人たちの危機感と反発を、モダニズム文学の原動力と規定し、その視点に立ち当時の文学者たちの著作から多数の実例を引用し、傍証にあてている。¹⁾

ケアリの著作は、ニーチェに始まりオルテガ・イ・ガセットの『大衆の反逆』において展開される知識人層の大衆嫌悪を、英国の文学者を中心に考察して行くが、その中で指摘される文学者には、イェーツ、ショー、ウルフ、ロレンス、パウンド、ウォー、オルダス・ハックスレー、E. M. フォスター、エリオット、F. R. リーヴィス、など当時の代表的な人々が含まれている。この意味において、たしかにモダニズム運動には、文化状況に対する多くの文学者たちの危機感が大きく影を落としていることは否めないであろう。またケアリのテーマは、先に述べたように、当時の文学・芸術上の実験がもたらした芸術革新運動を、知識人の大衆に対する拒否反応を併った閉鎖的で高踏的な文化擁護の動きとして捉え、その点では興味深いものがある。たしかに当時の英国文壇が、いくつかのサロンやサークルを基にした緊密な人間関係の中で運営され、あるいはたかだか1000部程度の発行部数しかもたなかった文芸誌が中心的媒体であった事実も、彼のテーマの正当性を補足するものではある。

しかしながら、同書の訳者あとがきで引用されている Terry Eagleton の TLS における書評

の批判は決定的であった。イーグルトンの批判は、第一にケアリのテーマがモダニズム全般を網羅するには一面的にすぎ、例外が多いこと、第二に都合のよい引用を部分的にすることで、文学者たちの多様な側面を無視してしまっている、という二点に集約できる。²⁾

モダニズム運動は、文学・芸術における広汎かつ複雑な運動であり、その動機を文学者たちの大衆に対する嫌悪のみで説明するのは、視点としては一部有効な部分はあるけれども、あまりにも狭量すぎるであろう。当時の代表的な文学者の多くが、中産階級出身あるいは高等教育修了者であったことを考えると、多かれ少なかれ彼等に大衆社会到来に対する漠然とした危機感があったのは疑えない。また第一次世界大戦の衝撃が、文化を担っているとの自覚の強い知識人層ほど大きなものであったことも否めないであろう。しかしながら、たしかにケアリの引用は部分的であり、彼のテーマの具体的な敷衍にあたる後半の事例研究で取り上げられる文学者は、ギッシング、ウェルズ、ベネット、ウィンダム・ルイスであり、ルイスの例を除いては積極的にモダニズム推進の中核的な役割を果たした文学者とは言えない。

このように主に英国の20年代以降のモダニズムの持つ大まかな特徴を挙げたが、本論においては英国のモダニズムを代表する文学者のひとりであるエリオットにおける文化と社会階層の捉え方、そして主たる文化創造の担い手であると同時にその継承者たる知識人のありかた、また文化継承の問題と深く関わる教育に関する考えについて考察を加え、モダニズムの新たな側面を考究することを試みたい。とくに文化論においては、彼のアイデアの直接的なひな形であるマシュー・アーノルドと比較し、知識人論においては‘national clerisy’の語の先駆的な使用者であったS. T. コールリッジとの関係にも簡単にではあるが触れてみたい。

I

エリオットのアーノルドへの言及は、公刊されている主なものでは、1920年の処女文芸評論集 *The Sacred Wood* の冒頭 ‘The perfect critic’ でのコールリッジとの比較、25年 *The Criterion* 10号の ‘Commentary’ における ‘The return of Mathew Arnold’ と題する短い書評、27年の ‘Herbert Bradley’ での二人の散文の比較文体論、30年の ‘Arnold and Pater’ と題する審美主義批判、32～33年のハーバード大学での連続講演 *The Use of Poetry and the Use of Criticism* での一章分の言及、さらに61年出版の *To Criticize the Critic* での詩人兼批評家としてのアーノルドの価値評価というように、彼の文学的営為のほぼ全期間にわたるものである。

上記の一連のエリオットによる言及の中で、本論のテーマとの関係で主な分析対象とすべきは、30年の「アーノルドとペーター」であろう。このエッセイにおいて、エリオットはアーノルドの主著ともいえるべき *Culture and Anarchy* (1869年) での文化論に言及し、なおかつその根本的な影響を受けつつも、結論的にはアーノルドの思考の不徹底を批判している。³⁾ とりわけ19世紀英国文学における文学史的な事件である審美主義文学に対するアーノルドの影響を追求し、彼の思想的欠陥を指摘するエリオットの舌鋒にはなかなか鋭いものがある。

最初にエリオットはこの小論の目的を ‘to indicate a direction from Arnold, through Pater, to the ‘nineties, with, of course, the solitary figure of Newman in the background,’⁴⁾ と宣言し、最終的にはここで述べた「一つの傾向」たる ‘Humanism’ はアーノルドが始祖であり、ここから宗教を思想と引き離す彼の文化論の欠陥が「孤高のニューマンとは対照的に」生じた

と断定する。⁵⁾ しかし急いで要約する前に、もっと緻密この論理の筋道を追って置く必要があるだろう。

アーノルドの文化論（教養論）に対して、まずエリオットは次のように述べる。

Culture has three aspects, according as we look at it in *Culture and Anarchy*, in *Essays in Criticism*, or in the abstract. It is in the first of these two books that Culture shows to best advantage. And the reason is clear: Culture there stands out against a background to which it is contrasted, a background of definite items of ignorance, vulgarity and prejudice. As an invective against the crudities of the industrialism of his time, the book is perfect of its kind. ⁶⁾

この引用部分は、アーノルドの文化論があれほどに受け入れられた理由として、時代背景、とくに当時の文化的、社会的状況を挙げる。しかしすぐにエリオットの口調は、次のようなほのめかしの形ながら、明確なアーノルドへの批判となる。

Even when we read that Culture ‘is a study of perfection’, we do not at that point raise an eyebrow to admire how much Culture appears to have arrogated from Religion. For we have shortly before been hearing something about ‘the will of God’; or of a joint firm called ‘reason and the will of God’ ⁷⁾

ここでエリオットがアーノルドの立論に対する大きな懸念を表明する理由は、アーノルドが文化の目的を ‘a study of perfection」 「完成の追求」と定義したときの ‘Religion’ との関係にある。エリオットの批判はまず「完成」という言葉が究極的には含まざるを得ない超越的な意味合いを、「文化が宗教を詐称することを賛美する」と断定する。さらに、エリオットのアーノルドに対する根本的な批判である彼の「ヒューマニズム」の匂いを、この文化概念に見取るのである。すなわち、人間中心主義的な文化概念が、宗教の権威を篡奪する恐れを指摘するのである。しかしながら、エリオットの引用のみでは、アーノルドの文化推奨が、どこまで「文化が宗教を詐称する」ことになるのかは、決めがたいものがある。そこで、エリオットの批判から転じて、アーノルド自身の著作に立ち返ってみよう。

アーノルドは『教養と無秩序』の前書きにおいて、その著書の意図を以下のように説明している。

The whole scope of the essay is to recommend culture as the great help out of our present difficulties; culture being a pursuit of our total perfection by means of getting to know, on all the matters which most concern us, the best which has been thought and said in the world; and through this knowledge, turning a stream of fresh and free thought upon our stock notions and habits, which we now follow staunchly but mechanically, vainly imagining that there is a virtue in following them staunchly which makes up for the mischief of following them mechanically. This, and this alone, is the scope of the following essay. ⁸⁾

アーノルドによれば、「文化とはわれわれにとってもっとも肝要な事のすべてを知ること、全体的な完成を目指し、「盲目的、機械的に従っているお定まりの習慣や思考に対して文化による新鮮で自由な流れを注ぎかけ」ることで「現今の困難からわれわれを救い出す有効な手段」なのである。ダーウィニズムによる既成の権威、とくに宗教的権威に大きな打撃を受け、漸進的ながら普通選挙法改正が労働者階級の社会的躍進をもたらしつつあった時代背景を、社会的、文化的無秩序の一步手前と感じたのがアーノルドの時代認識であった。そしてそれに対抗しうるものとしての彼の文化概念は、上記引用に窺えるように宗教的アナロジーで語られている。

しかしエリオットが引用し、その「ヒューマニズム」を指摘することになる要素は、上記引用中の‘our total perfection’を補足説明するアーノルドの以下の文章にある。

Certainly we are no enemies of the Nonconformists; for, on the contrary, what we aim at is their perfection. Culture, which is the study of perfection, leads us, as we in the following pages have shown, to conceive of true human perfection as a *harmonious* perfection, developing all sides of our humanity; and a *general* perfection, developing all parts of our society.⁹⁾

完成の追求としての文化は、人間性をすべてにわたり涵養する「調和のとれた」完成であり、社会のすべての機構を発展させる「一般的」完成を指向する真の人間の完成に導くとするアーノルドの考えには、確かにエリオットの指摘する「ヒューマニズム」のアーノルド的発想が基盤にあることは疑いえない。しかしながら、エリオットの批判は、これが宗教と比較対照されることにあった。「宗教を詐称する」という表現は、けっして自覚なしには使用できない言葉である。

再びエリオットによる批判に戻ると、先に引用した「アーノルドとペーター」の後半の部分で、アーノルドを引用して“something about ‘the will of God’; or of a joint firm called ‘reason and the will of God’”と述べている。この言葉はアーノルドの文化概念が、そうした宗教的なあるいは宗教と理性による正当性に支えられているように見えるが、実は宗教を詐称している、と非難するものである。すなわちエリオットの批判の中心は、アーノルドは宗教というものを人間を中心にした理神論的な立場から発想し、宗教が持つ超越的役割を文化に割り当てている、という事である。これはアーノルド自身が英国国教会の広教会派に近い発想をし、なおかつ彼の時代の思想的状況が、キリスト教のもつ神概念をそれまでよりは著しく世俗化させていたことと無縁ではないであろう。エリオットにとって、こうした「ヒューマニズム」は、宗教のもつ本来の意味を文化が詐称し、篡奪することに他ならない。そして彼の反ヒューマニズムは、彼の文化論における宗教の意味付けからよりはむしろ個人的な心情である信仰的側面から発しているように思われる。たとえば、先の引用でこの「ヒューマニズム」に對置されていたのは‘the solitary figure of Newman in the background’とあるように、ジョン・ヘンリー・ニューマンであった。

19世紀の英国国教会の高教会派を代表する人物のひとりであり、オックスフォード運動の中心的人物として活躍しながら、のちにローマ・カトリックに改宗し枢機卿となるニューマンは、エリオットにとって宗教を考える際の、試金石になっているようである。一例を挙げれば、

1927年のエッセイ ‘Francis Herbert Bradley’ は、ブラッドリーとアーノルドの散文の文体比較論であるが、ここでもアーノルドの文体における最大の弱点を哲学的訓練の欠陥に認め、その対局にブラッドリーと並べてニューマンの名を挙げている。¹⁰⁾ いっぽうアーノルド自身もその『教養と無秩序』において、ニューマンの名を挙げ、自分と彼とのオックスフォードにおいて培われた伝統と感性の共通の基盤に言及している。¹¹⁾ しかし、本論において、これ以上アーノルドとエリオットの文化論における宗教の位置づけについて触れるのは、あまりにも視野を広げすぎるくらいがあり、これに止めたい。ただ、少々単純すぎるが図式化しておけば、アーノルドにとって文化は、宗教に代替しうるものあるいは場合によっては宗教をも包含するくらいさえあるのに対し、エリオットにとっては、宗教の根源は文化とは次元を異にした人間の外に位置する超越的なものである。ここに二人の文化論の基盤の最大の相違があり、エリオットのアーノルド批判の核心がある。

II

エリオットの文化論の基本的な立場を論じるためには、*The Idea of a Christian Society* (1939年) と *Notes towards the Definition of Culture* (1948年) に触れなければならない。この二つの著作は彼の文化論を代表するものであるが、その間に10年近くの歳月と第二次世界大戦という歴史的な大事件があり、社会的状況も政治的状況も大きく異なっている。そのためか文章の性格にかなりの相違があり、後期に至るほど文体は抽象的で難渋になる傾向がある。また前著が、主にヨーロッパ社会の趨勢としてのキリスト教の衰退に対する護教的な社会論であるのに比べ、後著は文化を定義付け、ヨーロッパがひとつの文化圏として継続するためのキリスト教を中核とした文化論を主題としているという相違がある。

彼の文化の定義は、かつてRaymond Williamsが ‘a sliding of definitions’ と批判した定義の多様なずれがあるのも事実である。¹²⁾ しかしながら、まずは彼が『文化定義のための覚え書き』で述べたもっとも包括的な文化の概念を見てみたい。

By ‘culture’, then I mean first of all what the anthropologists mean: the way of life of a particular people living together in one place. That culture is made visible in their arts, in their social system, in their habits and customs, in their religion. ¹³⁾

「同一の場所とともに居住する特定の人々の生活のありかた」そのものを文化と捉えるエリオットの基本的な考えは、先に触れたアーノルドの指向する、個人に体现される知的教養の趣きの強い理念的な文化概念とはまったく異なっている。また宗教の扱い方に関しても、エリオットは非常に慎重であった。いっぽう、二人とも文化を述べる際に階級社会を前提にし、文化を支え、発展させ、社会全体の文化を改革していく一定の層としてのエリート集団を考え、その継承のための教育論に言及するという点ではその文化論は共通している。しかしながら、エリオットの文化の定義は、すくなくともこの箇所では、広汎で一般的なものである。彼はこの定義に立ち、アーノルドの文化論の最大の欠陥として ‘facile assumption of a relationship between culture and religion’ と批判する。¹⁴⁾ その文化論のもっとも大きな特徴である宗教との関わりについて、一カ所のみであるが引用をしておきたい。

We may go further and ask whether what we call the culture, and what we call the religion, of a people are not different aspects of the same thing: the culture being, essentially, the incarnation (so to speak) of the religion of a people. To put the matter in this way may throw light on my reservations concerning the word *relation*.¹⁵⁾

‘so to speak’ と一定の保留はあるものの、「文化は基本的には一定の人々の宗教が受肉したもの」と考えるエリオットは、‘relation’ という曖昧な語を使用したアーノルドを批判し、自身の文化概念の根本的な基盤としての宗教を前面に打ち出す。この宗教を基礎にした文化論は、基本的には1939年の『キリスト教社会の理念』の立論と異なっていない。そしてさらに、『文化定義のための覚え書き』では、文化を支え、保持する主体としての、エリート論を展開していくのである。

エリオットは、文化の中核に宗教を置いた。その意味においては、論理の自然な帰結として、文化を支え、発展させ、社会全体の文化を改革していく一定の層としてのエリート集団とは、当然の事ながら宗教者が挙げられるであろう。しかしながら彼は、そうした宗教者に限定したエリート概念を採らない。

Those groups formed of individuals apt for powers of government and administration, will direct the public life of the nation; the individuals composing them will be spoken of as ‘leaders’. There will be groups concerned with art, and groups concerned with science, and groups concerned with philosophy, as well as groups composing of men of action: and these groups are what we call élites.¹⁶⁾

この引用に示されるエリート集団の概念は、職能集団に近い発想である。すなわち、それぞれが高度に発達した「政治」「芸術」「科学」「哲学」「行動」に関わる専門分野を持つそうした集団を、彼はエリートと呼ぶ。このエリートは、わざわざ「集団」という言葉で注意深く表現されているが、アーノルドが考えた文化を体現した個人という発想ともまた従来の階級としてのエリートとも異なっている。この点は彼のエリート論の重要な要素であり、十分に比較しておく必要があるだろう。

Arnold is concerned primarily with the individual and the ‘perfection’ at which he should aim. It is true that in his famous classification of ‘Barbarians, Philistines, Populace’ he concerns himself with a critique of classes; but his criticism is confined to an indictment of these classes for their shortcomings, and does not proceed to consider what should be the proper function or ‘perfection’ of each class. The effect, therefore, is to exhort the individuals who would attain the peculiar kind of ‘perfection’ which Arnold calls ‘culture’, to rise superior to the limitations of any class, rather than to realise its highest attainable ideals.¹⁷⁾

アーノルドの関心が個人を主体とした文化の完成にあり、なおかつそれぞれの階級の適切な機

能、すなわち「完成」に向けての論を進めなかったがゆえに、個人を階級の限界を超越した地位に押し上げてしまった、というのがこの著作におけるアーノルド批判のもっとも明確な部分である。

これまでの論を振り返るとエリオットのアーノルド批判の根拠は、以下の二点に集約が可能であろう。まず文化を体現する個人という発想には、文化という概念を古典主義的な人文学の分野に限定し、具体的にはオックスフォードでの大学教育から得られるはずの ‘sweetness and light’ 「優美と英知」を備えた感性と知性の人格的完成というアーノルドのきわめて限定された知識人像が浮かびあがる。¹⁸⁾ しかしながら、アーノルドのように主に人文学的な分野に限定された教育を文化と考えることが可能であった時代と、エリオットが考えた時代の相違はあまりにも画然としている。先に触れたように、エリオットはそのエリート集団の概念のなかに、政治家、芸術家、科学者、哲学者、活動家を含めている。すなわち、文化の概念を拡大しなければ、エリオットの時代には対応できなかったのである。また本論の第一章で見た個人の「完全の追求」をヒューマニズムとして退けた彼にとっては、アーノルドの文化人像はあまりにも個人を主体とするものであり、「全的な完成をみた文化人など幻想に過ぎない」とさえ言い切る。¹⁹⁾

第二に、階級とエリート集団の関係について、エリオットもアーノルドも階級社会を前提として各々の文化論を立てている。しかしながら、アーノルドは彼の形容した「野蛮人、俗物、大衆」の階級区分において、文化を体現する個人の可能性を主に俗物たる中産階級を啓蒙、教育することから育成することに見だし、彼等文化人に至上の権威を与えた。それに対して、エリオットは文化人を職能集団と発想し、なおかつ個人ではなく社会全体の文化をまず問題にしており、その意味においてエリート集団は、その出自を各社会階級に持ちながらも、多様性を失わない。くわえて、エリオットはこうした職能集団たるエリート集団が、陥る可能性のある危険を二点指摘する。

While it appears that progress in civilisation will bring into being more specialised culture groups, we must not expect this development to be unattended by perils. Cultural disintegration may ensue upon cultural specialisation: and it is the most radical disintegration that a society can suffer. ... It must not be confused with another malady, ossification into a caste, as in Hindu India, of what may have been originally only a hierarchy of functions: ²⁰⁾

まず文化があまりにも特殊に専門化した集団によって担われ発展するときに、文化はもっとも根本的な解体を起こしうる、という考えかたには、職能の細分化が行き過ぎたときには十分に可能性のある危険であろう。つぎにエリオットはこうした集団の階級的固定化が、インドのカースト制度のような、世襲化した階級になることを懸念する。この危険を克服するためには、一つの社会には個々の階級を通底する共通の文化が存在しなければならないし、かつ階級の世襲的な固定化を避けなければ文化の発展は望めないものであろう。

上記二点の危険性のうち最初のものに対してエリオットは、本論第一章で論じたように、宗教の受肉したものとしての文化概念を打ち出しており、ここで言う共通の文化基盤として宗教を措定するのは、きわめて自然な論理的帰結である。さらにかつての『キリスト教社会の理念』

は、こうしたキリスト教を中核においた社会論であるが、そこでは政治論と教育論を包含したエリート論を展開し、コールリッジの‘national clerisy’の概念を多少修正しながら、‘the Community of Christians’の必要性を述べ、彼等の性格を‘These will be the consciously and thoughtfully practicing Christians, especially those of intellectual and spiritual superiority’と説明した。²¹⁾

また後者のエリート集団が世襲階級として固定化する危険性については、文化の伝搬の視点から、Karl Mannheimの *Man and Society* を批判的に援用しながら、教育論を中心に考察している。この文化の伝搬と階級の問題に関しては、エリオットにおいてもアーノルドにおいても主要な関心事のひとつであり、章を改めて短くではあるが触れておきたい。

III

前章の終わりで、エリート集団が世襲的な固定したカースト制度に近づく危険性をエリオットが指摘していることに触れた。すでに『キリスト教社会の理念』において彼がコールリッジの「ナショナル・クレリシー」の概念を批判的に援用した際にも、この危険性を指摘していた。そこでは、エリート集団の基本的な性格として「意識的で思慮深いキリスト教の実践者」を挙げ、彼等の共通文化を担保するものとしてのキリスト教に基づく教育の問題を論じた。少々長くなるが、エリオットの論を補強するためにその部分を引用しておこう。

In any Christian society which can be imagined for the future — in what M. Maritain calls a *pluralist* society — my ‘Community of Christians’ cannot be a body of the definite vocational outline of the ‘clerisy’ of Coleridge: which, viewed in a hundred years’ perspective, appears to approximate to the rigidity of a caste. The Community of Christians is not an organization, but a body of indefinite outliner; composed of both clergy and laity, of the more conscious, more spiritually and intellectually developed of both. It will be their identity of belief and aspiration, their background of a common system of education and a common culture, which will enable them to influence and be influenced by each other, and collectively to form the conscious mind and the conscience of the nation. ²²⁾

ここでは、コールリッジのエリート層の持つ厳格な階級制と一定の職業的輪郭をもった組織観を批判し、聖職者と平信徒からなるゆるやかな団体を想定している。そして彼等を結びつけ国家の意識的な良心を形成するために必要なものとして、「共通の教育制度」と「共通の文化」を打ち出している。

エリオットはこの二つの必要性を、彼の考えるエリート集団の機能である文化の創造と共有、その伝搬と発展の見地から、『文化定義のための覚え書き』においてさらに詳細に考察している。たとえば先に名を挙げたカール・マンハイムのエリート論を批判し、‘Dr. Mannheim begins to confuse elite with class.’²³⁾と指摘する。さらに文化の伝搬に関して、エリート集団が固定した階級化する危険性に再度言及し、エリート集団と階級の関係について独自の論を展開する。

I think that in the past the repository of this culture has been *the élite*, the major part of which was drawn from the dominant class of the time, constituting the primary consumers of the work of thought and art produced by the minority members, who will have originated from various classes, including that class itself. The units of this majority will, some of them, be individuals; others will be families. But the individuals from the dominant class who compose the nucleus of the cultural élite must not thereby be cut off from the class to which they belong, for without their membership of that class they would not have their party to play.²⁴⁾

この引用においては、エリート集団の多数は支配階級の出身としながらも、それをも含むさまざまな階級をエリート集団の出自であると考えている。エリオットにとって階級とは、ある程度固定したものでありかつ存続しなければならないものであるが、ここでは彼は階級の機能を家族のように文化を揺籃し、伝搬し、個人の文化を形成するものと措定している。この家族とは個人が成長する過程において、その所属する文化、すなわち本論第二章で引用した「同一の場所とともに居住する特定の人々の生活のありかた」を身につける機能を果たすものである。つまり、個人の最初の精神的、文化的な基盤はあくまで家族であり、第一義的な意味を持つものである。そしてそれを補完するものとしての教育が考えられている。

エリオットがエリート集団と階級との問題を考える際に特徴的なのは、階級社会と云う概念よりは、むしろ ‘a continuous gradation of cultural levels’ をもつ、‘a graded society’ を主張する点である。これは必ずしも階級社会と矛盾するものではないが、いささか唐突であり、「連続的文化の水準」における高い水準の定義を ‘a more conscious culture’、‘a greater specialisation of culture’ と説明するものの、いささか抽象的である。²⁵⁾ しかしながら、現実の英国社会を前提としたときに、彼の念頭には、従来の階級社会に替わりうる「階層社会」の理念が芽生えていたのかもしれない。しかし残念ながら彼の理論では、この社会の具体的な在り方に関してはそれ以上の言及はされていない。

本論においては、まず最初にアーノルドとの比較により、エリオットの文化論のもつ特徴を挙げた。「ヒューマニズム」というエリオットのアーノルド批判には、彼等の文化概念の大きな相違があり、それは宗教と文化の相関関係にほぼ要約できるものであった。ここでは、二人の思想家の宗教に対する姿勢の相違が際立っており、とくにエリオットが1927年に英国国教会に改宗し、高教会系の聖職者の指導を受けていた事を考え合わせると、「アーノルドとペーター」を執筆した時期の彼の信仰の性格が明確になってくる。また、ニューマンに対する彼の敬意にも着目すれば、エリオットがアーノルドの時代の国教会が示していたある種の世俗化に反発を感じていたことも事実であろう。アーノルドの文化概念が帯びる個人主義的傾向やその範囲もまたエリオットの反論を誘うものであった。「文化が一定の人々の宗教が受肉したものである」というエリオットの宗教性を色濃くした言葉が、まさに彼の文化概念の中核を占めているのである。これが、『キリスト教社会の理念』『文化定義のための覚え書き』の二つの重要な社会・文化論において、彼の発想の基盤を成している。

第二章においては、主に彼の後期の著作である『文化定義のための覚え書き』を中心に、文化を支え、発展させ、社会全体にその文化的影響を及ぼして行く主体としてのエリート論に考

察を加えた。彼のエリート論の主眼は、これもアーノルドとの比較によれば、エリートを社会階級ではなく広汎な階級から選別された一種の職能的な「集団」と捉え、エリートを階級として捉えたアーノルドとの画然たる相違を示している。とくにアーノルドのように個人を主体とするエリートの概念は、彼等を支える共通の文化の基盤が脆弱であるため孤立やその結果としての文化の崩壊をも招きやすい、とするエリオットの指摘は十分な説得力を持つ。

ただ、はたしてエリオットが考えたように宗教がエリートを支える実際の共通文化と成りうるのか、と問うてみると、疑問の余地が生じざるをえない。たとえばエリオットがこうした文化論を執筆していた1940年の時点で、英国社会のエリート層にどれほど宗教的情熱があったかを考えてみても、エリオットの主張は理想を掲げたものであっても、その有効性にはいささか否定的にならざるをえない。また20世紀初頭から続く大衆文化の急激な普及は、彼の文化論のもつ展望を大きく越えたものであった。しかしこの点に関しては、同じ危機意識を持っていたコールリッジやアーノルドとの比較やその理論の継承の問題、あるいは保守主義の系譜におけるエドモンド・バークの影響、さらにとくに教育を背景にした文化と宗教の関係におけるアーノルドとニューマンの意義など大きな課題が残っている。

第三章では、主にエリート集団と社会階級の関係に焦点をあてた。エリオットの構想するエリート集団は、アーノルドの考えた教育者を中心としたエリートとはかなり異なり、聖職者と平信徒よりなる広汎な集団である。とくに後期になるほど、この集団の構成員は職能的な専門家の意味合いを強める傾向が見受けられる。また彼のエリートは先に述べたように、階級‘class’とは一線を画し、ゆるやかに連続した文化水準を持つ社会におけるひとつの集団‘group’と定義づけられるところに、大きな特徴を持っている。

さらにアーノルドにおいてはエリートの養成の主なる手段は、学校教育にあった。しかしエリオットは、エリートを生み、育成する制度として第一義的には家族を措定した。たしかに家族による個人の精神形成や教育は、エリオットの文化論の基盤であった「文化は同一の場所とともに居住する特定の人々の生活のありかた」とする発想に立てば、決定的な意味を持つ。しかも彼のエリート集団形成における教育への評価は、時代を追うにつれ低くなって行く傾向がある。しかし一方でエリオットは、とくに1940年代以降教育論への関心が高く、いくつもの著述がある。これは今後の本研究の方向を示唆するものでもあろう。

本論の発想のひとつは、モダニズム運動における知識人たちの大衆嫌悪が、どれほど彼等の作品に影を落としているのかという素朴な疑問であった。本格的な大衆社会、大衆文化の登場と普及を前にして、彼等の文学的実験にはそうした大衆に対する反発の感情があるのは否定できないであろう。もちろんエリオットもこの感情の例外とはできない。しかしながら、彼はひとつの社会における文化の水準‘levels’を構想し、しばしばそれには価値評価も伴うのではあるが、それらすべてが共存しひとつの文化を形成する文化論を立てた。もちろん現時点からその後の大衆文化の席卷を見れば、彼の文化論の展望が狭かったことは指摘できるであろう。しかし、大衆にたいする感情に関しては、かつての彼の盟友かつ指導者であったエズラ・パウンドやウィンダム・ルイスといったモダニズムの代表的文学者と比較すれば、穏やかで冷静なものであった。現代文化の危機的状況のなかで、われわれの採るべき方向を探るときに、彼の文化論の持つ意義を感じざるをえないのである。

註

- 1) ジョン・ケアリ, 『知識人と大衆』, 東郷秀光 訳, 大月書店, 2000
- 2) 同上書, pp. 279-81.
- 3) T. S. Eliot, 'Arnold and Pater' in *Selected Essays*, (London: Faber, 1976), p. 431.
- 4) *Ibid.*, p. 431.
- 5) *Ibid.*, p. 434.
- 6) *Ibid.*, p. 432.
- 7) *Ibid.*, p. 433.
- 8) Mathew Arnold, *Culture and Anarchy*, 土井光知 註釋, (東京: 研究社, 1949), p. 6.
- 9) *Ibid.*, p. 11.
- 10) Eliot, *Selected Essays*, p. 445.
- 11) Arnold, *Culture and Anarchy*, p. 62.
- 12) Raymond Williams, 'T. S. Eliot' in *T. S. Eliot: Critical Assessments vol. IV*, Ed. Graham Clarke, (London: Christopher Helm, 1990), p. 149.
- 13) Eliot, *Notes towards the Definition of Culture*, (London: Faber, 1962), p. 120.
- 14) *Ibid.*, p. 28.
- 15) *Ibid.*, p. 28.
- 16) *Ibid.*, p. 36.
- 17) *Ibid.*, p. 22.
- 18) Arnold, *Culture and Anarchy*, p. 62. also see the title of the first chapter.
- 19) Eliot, *Notes towards the Definition of Culture*, p. 23.
- 20) *Ibid.*, p. 26.
- 21) *Ibid.*, pp. 62-3.
- 22) Eliot, *The Idea of a Christian Society*, (London: Faber, 1982), p. 68.
- 23) Eliot, *Notes towards the Definition of Culture*, p. 39.
- 24) *Ibid.*, p. 42.
- 25) *Ibid.*, p. 48.